



## 復活節第 6 主日 (ヨハネ 14:23-29)

聞いている言葉にお遣わしになった父の声が

「あなたがたが聞いている言葉はわたしのものではなく、わたしをお遣わしになった父のものである。」(14・24) 主の昇天を来週に控えた復活節第 6 主日に、イエスのこの言葉を考えてみることにしましょう。

聖母月の締めくくりである「聖母行列」を無事に終えることができました。聖母像を先頭に、ロザリオを唱えながら行列したわけですが、行列をしたということだけが聖母行列の意味ではないと思います。聖母と共にこの五月を歩む。聖母の生き方に倣ってこの五月を生きる。そういうことを最終確認するための行列ではないでしょうか。

では聖母の生き方とはどのようなものだったのでしょうか。それはイエス・キリストの言葉を生きて力ある言葉として受け止める生き方でした。たとえば婚礼の席でぶどう酒がなくなったとき、イエスの言葉が今にも台無しになろうとしていた婚礼を喜びに変えました。この時イエスの言葉が場面を喜びに変えることを信じて疑わなかったのはマリアお一人だったのです。

ですからわたしたちの聖母行列も、イエスの言葉を生きて力ある言葉として受け止めたマリア様の生涯に、これからも見倣っていきますという気持ちで聖母行列に参加したわけです。イエス・キリストの言葉は今は「聖書」という文字に書かれた言葉ですが、私たちもマリアに倣い、「生きた言葉として私たちに語られている」そう受け止める工夫・努力が必要です。その努力はふだんの教会生活から始まっているかも知れません。

私は田平教会に赴任するに当たって忘れられないことがあります。赴任したその年の夏に、大司教様が駐日バチカン大使を連れて平戸地区を視察で回られた折、田平教会に立ち寄ってくださいました。田平教会の説明を私が引き受け、その内容を大司教様が大使に英語で通訳します。「この教会はおよそ百年前に中田藤吉神父様が先頭に立ち、信徒が力を合わせて建てたものです。」

さらに「中田藤吉神父様から百年後に、師の血筋に当たる中田神父が献堂百周年を祝うことになります。これも大司教様の粋な計らいです」と大司教様に伝えたのです。その時大使に通訳しようとしていた大司教様は驚いたような顔で私を見て、「そうだったのかね?」と言われました。私は心の中で「そこは、『そうなんだよ』と言ってくださってよいのに」と思ったものでした。

私はこの話を単なる思い出話で話したのではなく、説教の冒頭で触れたイエスの言葉を思い出すきっかけにしたかったのです。「あなたがたが聞いている言葉はわたしのものではなく、わたしをお遣わしになった父のものである。」イエス・キリストの言葉は、福音書に刻まれた二千年前の話ではなく、今も生きて、力ある言葉だということです。

大司教様が私を田平教会に任命したとき、本当に百年前の中田藤吉

神父様と私のつながりには気づいてなかったかも知れません。けれども神の摂理は、今も変わらず働いているのです。大司教様を通して、神は不思議な計らいを、実現させてくださったのです。ある意味大司教様がお気づきで無かったということが、神の摂理であることを物語っています。こうして、ふだんから「神の言葉は生きていて力がある」という体験を積むことで、福音書に語られるイエスの言葉により深く耳を傾けることができるようになるでしょう。

もう一つ考えたいことは、「弁護者、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊が、あなたがたにすべてのことを教え、わたしが話したことをことごとく思い起こさせてくださる。」(14・26)のみことばです。私たちが触れることのできるイエスの言葉も、自分勝手に解釈すべきではありません。聖霊の照らしがあつてこそ、その意味が説き明かされるのです。

聖書を読み、学ぶ中で、聖霊の照らしはどのように与えられるのでしょうか。私はそのとおきのおきの場が「聖書の分かち合い」だと思っています。田平教会ではまだ実践されておりませんが、少人数で聖書の箇所を読み、それについて感じたことを分かち合うという聖書の学びです。

イエスはかつてこう言われました。「二人または三人がわたしの名によって集まるところには、わたしもその中にいるのである。」(マタイ 18・20) 少人数で聖書を読むとき、聖霊が聖書の読み方を導いてくださり、よりよい学びをお与えになるのです。一人で専門書を読み、聖書を学ぶことも可能ですが、集まって分かち合いをするなら、聖霊の照らしによって大きな実りが得られることでしょう。

来週になると、私たちは主の昇天を祝います。主が天に昇られるのは、聖霊をお与えになるからです。私たちに与えられたイエスのみことばが、今も生きて力強く働いてくださる。そのためには聖霊による解き明かしがいつも必要です。聖霊のご降臨を願いながら、イエスのみ心の月へと続いていく一週間を希望のうちに歩むことにしましょう。

主の昇天(ルカ 24:46-53)